

太鼓 - 戦国中世のハイテク情報機器 -

太鼓楼に設置されている現在の太鼓は、一九五六年に八家町の太鼓と交換したものと云われている。以前の太鼓は、一七〇二年、姫路城主本多忠國が、登城太鼓として摂州大阪渡辺村の「太鼓屋又兵衛」、通称「太鼓又」に依頼作成したものと伝えられている。

「太鼓屋」という屋号は、大坂落城後に入城した松平忠明（寛永十六年に姫路城主になる）が、名工として評判の高い渡辺村に陣太鼓を作らせたところ、あまりにも見事な出来栄に感嘆し、称号を与えたと云われている。

従って、現在の太鼓は八家町で使われていた太鼓である。胴内部の記銘によると、明治三十五年九月十四日調整・大阪市南区西浜・太鼓製造所 石田又兵衛重吉・細工方 藤本三十郎中村玉助 国府幾太郎 善吉とある。また、太鼓皮の記銘には、維時 昭和二十六年十月吉祥 飾磨郡四鄉村見野 太鼓販売並びに張替商 光本惣助重政 維時



再建なった太鼓楼に置かれていた大大鼓
現在、真田辰次郎氏によって太鼓胴の修理、皮の張替工事がなされた。鉄釘は古い物を磨きなおして使用してある。

昭和二十九年十月吉日 以下同人とある。

この太鼓は、ほとんどの太鼓がそうであるように、材料は樺の一本彫りで、大きさは径1尺、牛革が二面に貼られた鉄打ち太鼓の構造を持っている。

古来より、太鼓は強弱・長短を打ち分けて、情動を喚起する力をもち、宗教的な秘儀性を表現するものであったが、同時に言語メッセージとして情報の遠隔伝達を可能にする有力な通信機器として機能していた。歴史的には、神道・仏教の行事の具として使われ、現在も雅楽の重要な楽器の一つである。しかし、太鼓楼に納められた太鼓は後者の通信機能を持った機器としてまず登場したに違いない。前述のように中世の自治都市・寺内町の自主防衛には欠かせない装置であった。

ちなみに、数年前、本願寺の太鼓楼を見学した折り、中に格納されている太鼓を見る機会があったが、大小二種の太鼓が装備されており、情報伝達の役割を果たしていたことが理解された。特に大大鼓は直径が2尺近くあり、叩いて見ると鼓楼全体が振動し、地鳴りのような低周期弾性波が発生し、相当遠隔地に情報を伝達する能力を持っていた。おそらく、この太鼓は当時のハイテク通信機器ではなかつ

たかと推測される。

さて、本徳寺が八家町と太鼓を交換した経緯は定かではないが、戦後の本徳寺の経営危機と無関係ではないであろう。戦前まで、本徳寺は創設時の役割を踏まえ、本徳寺は播磨別格別院として、播州一円の本派寺院ならびに全真宗門信徒を構成員として運営されていた。（真宗本願寺派別格別院本徳寺寺則）

戦後しばらくは、本徳寺の行事には、播州各地より門信徒が参集し、本堂が満堂であった。本徳寺の周辺には各地の念仏講がお講屋を建て、宿泊所として利用していた。門前には露天行商が並び人があふれ、大法要の時には山陽電車が臨時増発をする事さえあった。

しかし、戦後の一方的・画一的な制度変革により、結果として経営母胎を失い、本徳寺の護持が十分に議論されないまま放置された。その結果、一時寺務の停止にまで追い込まれた悲惨な経験をもっている。

同じような窮状は大なり小なり地方の中核寺院（別格別院）は経験しているが、とりわけ播磨国の中本寺という広い行政域と突出した寺格を持っていたため、戦後の特定門徒を擁する一般寺院に移行することはほとんど不可能であった。

新たな観点から新しい形態での本徳寺再興の端緒をこの度の復興事業で開かれればこの上ないことである。

今年、2月1日に、太鼓師・真田辰次郎氏の手によって、古い形式を尊重して修理がされ、鼓楼の最上階に設置された。特別行事には本徳寺の復興を期して、すばらしい太鼓の音が響くはずである。